



「阪神淡路大震災から22年 今思うこと」 1月16日の全校集会より

明日の1月17日で、阪神淡路大震災から、丸22年になります。去年の1月の全校集会でも確か、この震災のことについてお話したと思います。みなさんの生まれる前のことで、おそらく、なかなか実感としてわかないでしょうが、阪神淡路大震災にしる、6年前の東日本大震災にしる、その時代を生きた者として、何かを伝えることができたという思いでお話したいと思います。



いまから読む文章は、阪神淡路大震災の時にお父さんを亡くした25歳の女性が東日本大震災のあと、東北を訪れたときの思いを「東北復興新聞」につづった文章です。

**私は東北が大好きだ。いつでも、「よく来たね」と言って迎えてくれる家族がいるから。会いたいひとがいるから。**

震災が起こるまで、東北のひとのあたたかさとか、魅力とか、美味しい海の幸だとか、何ひとつ知らなかった。あの日に起きた津波がとにかく憎かった。テレビの前で何もできずにいる自分が、本当にちっぽけに思えた。悔しかった。「何かしたい」と思って、はじめて東北に行った。でも、何もできなかった。津波が襲った町は、あまりにも残酷すぎた。私がおこに来る意味はないかもしれない。そんなことを思っていた。けれど私に「小島さんが元気な姿を見せに来てくれることで、自分たちもこんなふうになれるんだって、希望になるんだよ」と教えてくれた先生がいた。私の父は、阪神淡路大震災で亡くなった。私は3歳だった。その事実を受け止めるにはあまりにも幼すぎた。

でも、私は今、お父さんの死を受け入れられている。それは、私が成長するにつれて、震災と向き合うきっかけをつくってくれたひとがいたからだ。これまで20年間、たくさんのひとが忘れずにいてくれたことが、本当にうれしかったから、私はただ、してもらったことをそのまま返していきたいと思った。

津波で親を亡くした女の子が、私の膝の上に乗って遊んでいた時、なんだかホッとした。私も震災のあと、こうやって、ひとの膝に座って遊ぶのが好きだったなあって思い出した。中1の子が、「津波の前にもどりたいなあ」とつぶやいたのを聞いて、隣に寄り添ってあげられてよかったと思った。学校に行けずに引きこもっていた女の子が、私の震災の話聞いて、外に出るようになった。何もなくなってしまった町を散歩しながら、「ここに私の家があったんだよ」と教えてもらった。

**この子たちの、この瞬間を受け止められる存在でよかったと思った。**

神戸の震災でお父さんを亡くしたからこそ、気付けたことがあった。「生きている」というただそれだけのことが、誰かの希望になれるんだ。「何かしなくちゃ」って思ってたけど、そうじゃない。自分のために、東北のひとたちのために、いっぱい笑って生きていきたいと思う。

みなさんは、この文を聞いてどう感じましたか。わたしが、特に好きなのは、「生きている」というただそれだけのことが、誰かの希望になれるんだ。」というところです。自分自身を振り返っても、特に中学生や高校生のころは、「生きる意味って何だろう」「自分の存在価値って何だろう」と思い、自分がとでもちっぽけな存在に思えた時期がありました。でもいろいろな体験や教師という仕事を通して、少しでも人の役に立てたと感じられたときに、自分の生きがいというものを実感できたように思います。この人も、精一杯、前向きに生きることで、自分と同じようなつらい体験をした人に希望や喜びを与えることのできる存在になれるんだということを、身をもって感じられたのだと思います。だからこそ、お父さんの死ですら、今の自分にとって意味のあるものであったとポジティブにとらえられたのではないのでしょうか。

今日は、阪神淡路大震災22年を前にして、「生きる意味」をもう一度、みなさんに考えてほしくて、話を聞いてもらいました。